

平成 30 年 6 月 15 日現在

機関番号：32627

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370548

研究課題名(和文) 願文写本の日中比較に基づく日本漢文体の遡源的研究

研究課題名(英文) A comparison between Buddhist prayers from Dunhuang and ancient hand-copied books from Japan

研究代表者

山本 真吾 (YAMAMOTO, Shingo)

白百合女子大学・文学部・教授

研究者番号：70210531

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本漢文体には、中国古典文には見られない日本語的書記要素の混入することが指摘されて久しいが、その原初段階の事情については不明な点が多い。その解明のために、中国古典文と日本側の文章の、相互に近似する内容の文章を比較することが有効であるとの見通しに基づき、仏教儀礼文の一種である願文を対象として選定した。写本学(codicologie)の研究手法を導入することによって敦煌願文の書写年代を推定し、その上で、日本側の古写本との書記要素の比較を行った。その結果、敦煌願文の写本には、字形ではなく同一の発音による誤写の事例が認められ、この点が日本側の古写本との大きな異なりであることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of my study to compare between Buddhist prayers(gammon願文) from Dunhuang in the Aurel Stein collections in the British Museum, the Paul Pelliot in the French National Library collections in the and ancient hand-copied books from Japan. So I thought it was effective to introduce study results of codicology of Buddhist manuscripts written in Chinese script from China and Japan. In order to estimate the date of the manuscripts, my research has involved measuring the dimensions of the grid of paper fibre, the panel width and height, lines per panel, and observing the forms of Chinese characters. The conclusion is as follows. 1, The oldest is the one in 6 end of a century in the manuscript of the gammon made in China, and the oldest is the one in 12 end of a century in the manuscript of the gammon made in China. 2, It's replaced between the characters of the same pronunciation in Chinese manuscripts, but Japanese manuscripts doesn't have the phenomenon.

研究分野：日本語史

キーワード：敦煌願文 写本学 和習 日本漢文 変体漢文

1. 研究開始当初の背景

日本語を母語とする話者が記録した日本漢文体の研究は、中国古典文との比較に基づき、どういった日本語的書記要素が観察されるかを検討する作業を通して、日本漢文体としての言語的特徴を明らかにすることを目的とする。研究代表者もこのような観点から、仏教儀礼文の表白と願文を取り上げ、日本漢文体史における位置づけを目指して、『平安鎌倉時代における表白・願文の文体の研究』（2006年、汲古書院）を公にした。この著書には、今後に残された重要課題として、日本漢文体がどのような中国古典文を受容し、いかなる過程を経て成立したかの解明が望まれることを提示しておいた。こういった日本漢文体の遡源的研究を推進する上で、従来の研究で問題として感じることは、内容も時代も異なる中国古典文と比較して、日本語的要素の混入の有無を論じていた点である。日本漢文体の内実さえ種々のものがあって多様であるのに、中国古典文が単一の文体であるとは考えがたく、そういった精度に欠く比較検討を重ねてきた点に疑問を感じるのである。そこで、こういった問題を克服すべく、フランス国立図書館所蔵のペリオ本敦煌願文写本、イギリスの大英図書館所蔵のスタン本敦煌願文写本の原本調査に基づき、中国古典文の「願文」と題された文体と同一の文体呼称を有し、直接的な関係が想定し得る日本の願文との比較を行うことが有効ではないかと考えるに至った。

2. 研究の目的

本研究は、日本語を母語とする話者が記録した日本漢文体の成立過程を解明することを目指し、その一階梯として、原初段階の実態を明らかにすることを目的とする。日本漢文体には、中国古典文には見られない日本語的書記要素（和習）の混入することが指摘されて久しいが、その原初段階の事情については不明な点が多い。その解明のために、中国古典文と日本側の文章の、相互に近似する内容の文章を比較することが有効であるとの見通しに基づき、仏教儀礼文の一種である願文を対象として選定した。まず、写本学

(codicologie)の研究手法を導入することによって敦煌願文の書写年代を推定し、その上で、日本側の古写本との書記要素の比較を行う。この作業を通して日本漢文体の成立過程をより精密でダイナミックに解明することができると思う。

3. 研究の方法

次の3つの柱に基づいて、実施した。

- (1)大英図書館所蔵スタン本願文写本、フランス国立図書館所蔵ペリオ本願文写本の現地調査を行い、写本学の手法を活用して、主要な願文文献についての年代推定を行う。
- (2)日本語話者の作成した、古代願文写本の所在確認・整理作業を行い、近畿地方を中心とする寺院経蔵や古文庫等において原本の現地調査を行う。
- (3)書記史、文体史の観点から、日本側の願文と敦煌願文写本とを比較して共通点と異なりを分析して記述する。

4. 研究成果

- (1) 敦煌願文及び日本側古写本願文の現地調査の成果

まず、大英図書館及びフランス国立図書館において下記の敦煌文献の原本調査を実施した。調査点数は以下のとおりである。

【大英図書館所蔵 Stein本】

2012年11月；8点
2013年6月；6点
2014年6月；10点
2015年8月；2点
2016年8月；11点
2017年9月；8点

【フランス国立図書館所蔵 Pelliot本】

2011年11月；18点
2013年11月；12点
2014年6月；20点
2015年8月；8点

原本調査に際して、写本学(codicologie)の研究手法を導入することによって敦煌願文の書写年代を推定した。その主たる観点は、次の～であり、エクセル上でデータ蓄積を行った。

書誌的情報

装丁・一紙長・紙質・罫目など

漢字字体情報；HNG

Hanzi Normative Glyphs

<http://www.joao-roiz.jp/HNG/>

内容情報；

奥書・文中の固有名詞、表現内容

今回調査の範囲で、中国願文写本(敦煌本)で最古の写本は『十地論法雲地第十卷之十二卷末願文』(p.2086)であり、奥書より西暦594年書写と知られる。その書誌情報は次のとおりである。

・卷子本(27.7×42.8)薄手楮紙黄染、篋目26本/3cm、隋代初期的字体

奥書：「開皇十四年四月二十五日」(2014年6月2日調査)

ちなみに、大英図書館所蔵文献の中で最古の願文写本は『願文擬』(S.972)と見られ、奥書はないものの、その書写年代は8世紀中葉と推定される。

・卷子本(27.4×33.5)、楮紙力(西洋紙裏打ノタメ不分明)、篋目15本/3cm、整いたる行草体(2014年6月10日調査)

日本最古の仏經写本の古例としては、686(朱鳥元)年『金剛場陀羅尼經』(小川広巳氏旧蔵)、706(慶雲3)年『浄名玄論』(神田喜一郎氏旧蔵)が知られるが、願文写本としては、『藤原常房願文』(弘法大師空海作か)が、1166(平安時代永万2)年の書写で最古と見られる。その書誌情報は次のとおりである。

・高山寺蔵(重文第4部117函16号)

○平安時代永万2年写、無点、粘葉柀型本、17.5cm×15.5cm、楮紙、押界8行(高14.1cm、幅1.7cm)、1行13~15字、墨附2丁、「高山寺」朱印

(表紙)臺第十四

(外題)(題簽)「藤原常房願文」

(奥書)写本云以済恩寺御筆本書云々ノ範泉之ノ一交了

(朱)「永万二年正月三日於勤修寺理趣院書了」

以上の調査を通して、次のようなことが判明した。

中国側の願文古写本は、六世紀末のものが最古であり、日本側のそれは、12世紀のものが最古である。

中国側の願文には、発音が同じであれば字形の異なる漢字を使用することがあるが、日本側の願文には見られない(例、林=臨; lin 1)。中国側の願文の書写には、音読が介在している可能性がある。

(2) 仮名書き願文の表記と文体

中国古典に淵源を有する願文は、日本においても漢文体を継承した。ところが時代が下るにつれ、仮名書きの文章が出現するようになる。これらの言語的性格について分析を行った。中世の平仮名書き願文及び片仮名書き願文については、次の諸例のごとく、基本的には漢文訓読の用語が主である。

形容詞連用形、打消「ず」連用形+して(和文語は、「~+て」)

・子孫たえすして報国の仁たるへく八(「寛元4年7月16日九条道家願文」鎌倉遺文6723)

助動詞「ごとし」(和文語は「やうなり」)

・又しかも彼願書のことく、新立の庄園を寄附して勤行をいたさすは(「弘長2年6月25日行清立願文案」同8825)

副詞「いはむや」(和文語は「まさに」)

・いはんやそ王せん王のをんねむをや(「元亨元年10月4日後伏見上皇筆願文案」同27872)

副詞「ひそかに」(和文語は「しのびに」)

・右、ひそかに生涯の云為を思へ八(「弘長2年6月25日行清立願文案」前出)

副詞「やうやく」(和文語は「やうやう」)

・右、成風の經始やうやくなりて(「弘長2年6月25日行清立願文案」前出)

しかし、一方で、劣勢ながらも、いわゆる和文語と見られる語彙、語法も指摘される。

形容詞連用形+て

・いよ々々めてたくて、しそんはんしやう、また 心やすくて、けんせあんをん、こしや

うせん所(「弘安5年7月23日藤原女願文」同14654)

副詞「やがて」

・やかてむしやうの道心ををこし(「建治3年4月13日平氏女・彘んさい願文」前出)

副詞「とく」(訓読語は「すみやかに」)

・そのつみをめつして、かならず々々とくむかへさせ給へ(「弘安元年閏10月15日藤原氏女願文」同13228)

さらに、記録語の語法も指摘できる。

形式名詞「あひだ」

・世々生々ノアイタ、アイワチヲハナレ、シツトチウマムヲ、リシシス(「正安4年尼照基写経願文」前出)

連体詞「くだんの」

・よつてくわんもんの状くだんのことし(「元亨4年1月3日良実願文」同28635)

このような状況を踏まえた上で、さらに使役・尊敬等の表現を担うとされる助動詞、和文語「す」「さす」と訓読語(及び記録語)

「しむ」の使用状況を観察した。その結果、

「す」「さす」を使用する願文...21例

「しむ」を使用する願文...9例

「す」「さす」と「しむ」の双方を使用する願文...3例

「す」「さす」「しむ」の重複形を使用する願文...8例

訓読語(及び記録語)の指標たる「しむ」は、『鎌倉遺文』3168「貞応2(1223)年10月田中宗清願文案」、同6723「寛元4(1248)年7月十16日九条道家願文」などに見え、以降鎌倉時代を通じて使用され、廃れることはない。一方、和文語の指標「す」「さす」の方は、11364「文永10(1273)年7月14日藤原高光願文」が最初の例であって、「しむ」よりやや遅れて出現する。しかし、これ以降やはり鎌倉時代を通じて使用されるようになる。

また、「弘安5年7月23日藤原重直願文」(『鎌倉遺文』14651)など(他2例)には

同一文章中に、「す」(「さす」と「しむ」)の双方が使用されている。

さらに、(4)のように、弘安元年頃から、「す」「さす」「しむ」を重複させて用いる「せさせ」「させさせ」「させしめ」のような新たな表現形式も見える。

・かならずみろくへ、あはせさせしめ給へ(「弘安元年藤原女願文」同13240)

・しやうしゆせさせさせ給へ(「弘安元年1月1日シンクワン願文」同13242)

元来、漢文を起源とする願文の文体は、漢文を読み下したところの、漢文訓読文の文体を採るものであった。しかして、使役・尊敬の助動詞は「しむ」を専ら選択するものであったと考えられるのである。これを承け、鎌倉時代の仮名書き願文も基本的には「しむ」が時代を通じて使用される状況が看取される。しかし、やや遅れて「す」「さす」を使用する仮名書き願文が出現するようになり、平行して行われている。このように「す」「さす」も「しむ」も仮名書き願文においては等価の文法的機能を担って使用される環境を背景として、やがて同一文章中に「す」(「さす」と「しむ」とが使用される願文が出現したり、さらには双方の重複形が見え始めることとなったと見られる。

このように、鎌倉時代における「平仮名書き願文」なる新たな表記体の出現は、和文語「す」「さす」の混入を許容する文体を形成し、やがては文章としては和文・漢文訓読の両方の用語を使用する和漢混淆文を、語のレベルでは重複形を生み出すこととなった。ただし、女性語、男性語という観点でいえば、単純には割り切れず、女性の願文であっても「しむ」を用いるものもあれば、「す」「さす」を用いる男性の手になる願文もある。

また、片仮名交じり文の願文の場合には、これとは少し事情が異なるようである。

「す」「さす」を使用する願文...用例無し

「しむ」を使用する願文...11例

「す」「さす」「しむ」の重複形を使用する願文…用例無し

「す」（「さす」と「しむ」の双方を使用する願文…1例

「文保2(1318)年2月19日某立願文」(『鎌倉遺文』26557)に「す」「さす」も「しむ」も同一文章中に出現するという混淆現象を指摘することができるが、他には「す」「さす」の混入を許容するものは見出しがたく、片仮名書き願文については基本的には漢文訓読文乃至は記録体にとどまるものであったと見てよい。

(3) 敦煌願文の漢語と『性靈集』所収願文の漢語

敦煌願文の語彙の性格については、敏春芳『敦煌願文詞彙研究』(民族出版社、2013年)に詳しい。ここでは、日本側の古代願文として纏まった文章を伝える『性靈集』所収願文(弘法大師空海作)の漢語と比較し、双方の語彙的特徴を抽出してみたい。

まず、敦煌願文の漢語と『性靈集』所収願文の漢語には次のように同一の語彙が見られ、共通性の高さがうかがわれる。

「拔濟」

- ・无方抽減、唯托福田、拔濟劣微、求鑄痛切(燃灯祈願文、p2850)
- ・是故比年爲、拔濟四恩、具足二利(性靈集卷第8・勸進奉造佛塔知識書)

「群迷」

- ・伏願常伝三乘奥义、演化群迷(比丘法堅発願文、p2726)
- ・爰、覺王垂悲接誘群迷、智臣騎忍汲引衆慙(性靈集卷第8・爲亡弟子智泉達親文)

「有情」

- ・然后散沾法界、普及有情(僧患文、s5561)
- s = スタイン本
- ・伏乞、(略)毛鱗角冠、蹄履尾裙、有情非情、動物植物、同鑒平等之佛性、忽證不二之大衍(性靈集卷第6・爲式部笠丞願文)

「平等」

- ・爲十方六道、三界四生、善惡怨親、一相平等(摩訶摩耶經彭普信題記願文、p2160)・

伏願、以此妙業、崇彼神威、金剛惠日銷竭愛河、實相智杵摧碎邪山、自他平等斷割妄執(性靈集卷第6・爲藤中納言大使願文)

「藏舟」

- ・但以藏舟易遠、蟾影難留(亡考文、s5957 = 甲・p3765 = 乙)
- ・聖也不免何況凡夫、逝水藏舟良有以也(性靈集卷第8・爲弟子求寂眞際入冥扉達親文)

「希夷」

- ・諸公主性道希夷、言容婉秀(道家爲皇帝后祈福文、s4652)
- ・雖云希夷玄妙、忽冥然、然猶屋樓構宮、夢幻築室(性靈集卷第7・荒城大夫奉造幡上佛像願文)

『性靈集』に見えない敦煌願文の漢語の例としては、

「撫育」

- ・撫育懸情、順和光于高下(亡文范本等、s5639)

「究竟」

- ・以法宇爲究竟之長、以真原是歸依之地(願文、p2226)

などがある。これらは、「年去年來れ共、忘れがたきは撫育の昔の恩、夢のごとく幻のごとし」(『平家物語』卷第3少將都歸)、「究竟の弓の上手どもが矢さきをそろへて」(同卷第4橋合戦)のように、中世漢語として特徴的なものである。この他、「助治」(p2058)、「落叶」(s2832)、「含生」(p2044)、「四百四病」(p2058)

なども敦煌願文に見られ、『性靈集』に見えないものであるが、これらは下っても日本側の諸文献にも見出し難い語彙である。

これまでの研究では、敦煌願文と日本側の願文の「共通」する点の追求に主眼が置かれてきたが、当然のことながら「異なり」の部分にも目を向ける必要がある。敦煌願文に用いられる漢語であっても、日本側のそれに見えない語も多々ある。受容されなかった漢語はどのような性格のものであるのか。なぜ、

それらは日本側の願文には用いられないのか、その要因についても考察を加える必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

山本真吾、東寺蔵『願文集』所収願文の文体について、歴史言語学の射程、2018、印刷中

山本真吾、文体史はいかに可能か、日本語史叙述の方法、査読無、2016、265-289、

山本真吾、寺院経蔵の聖教類と文学作品をつなぐ言葉と文体、仏教文学、査読無、42号、2016、95-106

山本真吾、仮名書き願文の表記と文体『鎌倉遺文』所収願文を中心に一、日本文学、査読有、63号、2014、2-11

〔学会発表〕(計6件)

山本真吾、大英図書館蔵スタイン本敦煌願文と日本所在願文の古写本の比較研究、ワークショップ Translation and Transformation (国際学会) 英国・オックスフォード大学、2017

山本真吾、寺院経蔵の聖教類と文学作品をつなぐ言葉と文体、仏教文学会、大正大学、2016

山本真吾、中日文体比較の方法 敦煌願文を資料として、国際シンポジウム日本語教育と日本語学、集美大学(廈門中華人民共和国) 2016

山本真吾、漢文の日本的受容の中世的展開、国際シンポジウム、インドネシア・エアランゲ大学、2015

山本真吾、古代に於ける漢文の日本的受容について、国際シンポジウム「日本の言語と文学」、インドネシア・ウィディアタマ大学、2015

山本真吾、願文の文体的変容 敦煌願文の調査から一、国際シンポジウム「言語交渉からみる日本語の諸相」、大韓民国・高麗大学、2014

〔図書〕(計1件)

月本雅幸・奥田勲・肥爪周二・山本真吾、大東急記念文庫善本叢刊中古中世篇『伝記・願文・語学等』、汲古書院、2016、12-19

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 真吾 (YAMAMOTO, Shingo)

白百合女子大学・文学部・教授

研究者番号：70210531